

酷暑。この数年の異常気象はラジオでも毎日伝えられていた。

『今日も体温を超える気温になります。熱中症にご注意ください。各地の気温は……』

家を出る前に聴いたパーソナリティーの声を思い出す。

それにしても暑い。そういえば昨日はマンホールに触れた子供が火傷を負ったというニュースを聴いた。変なところで転んだら自分も危ないかもしれない――

「わっ！」

「っー！」

考え事をしていたせいか、暑さでぼーっとしてしまっていたのか。何かにぶつかってしまった。この辺りに物はないはずだったし、白杖には何も当たらなかったはずなのに。

「いたた」

思いきり前に転んでしまったけれど、幸いマンホールのような金属の上ではなかったようだ。

しかしほっとしたのも束の間、近くからおじいさんの声が聞こえた。

「すまない、大丈夫かい」

やばい、と思った。ぶつかったのは人だったのだ。

「ごめんなさい！」

急いで立ち上がり、声のした方を向く。声のする位置は低い。座っているのだろうか。

「いや……大丈夫かい？」

「はい、ごめんなさい」

穏やかな声だけれど、少し苦しうにも聞こえた。輝《ひかる》は目が見えないせいで声や音には敏感なのだ。

「おじいさん……？」

声の雰囲気と話し方から謝罪を無視するような人には思えなかったのだが、言葉が返ってこない。さっきの声が苦しうに聞こえたのでもかしらどこか怪我をさせてしまったのかもしれない。もしぶつかったときに転んで頭を打っていたりしたら、そう思うと血の気が引いた。

「おじいさん？ どこか怪我を」

「……いや、ちょっと具合が悪くて座っていたんだ。君に気付かず足を伸ばしてしまって、すまないの……」

そうだったのか。でも座っていて治るものでもないかもしれない。

「大丈夫ですか？！ どう悪いですか？」

「頭痛と目眩が」

思い当たるのは一つしかなかった。毎日ラジオから聴こえてくる注意報。

「熱中症！ ちょっと待ってくださいね、ええと……」

ここがアパートの近くだということは分かっている。転んだことで動転してしまっていた気持ちをなん

とか落ち着かせ、現在地を頭に思い描く。

（ここは……そうだ！）

この辺りには自動販売機があったはずだ。けれど目の見えない輝にはどれがスポーツドリンクなのかは分からない。常に同じものが同じ場所に置かれていたとは限らないし、そもそも最初から何が売られているかも分からない。おじいさんが自分で見ることができれば良いのだけれど、それも難しいかもしれない。

「おじいさん、ここから動かないでくださいね！」

「え、あー！」

この道の先、少し進んだところの角を曲がったところに診療所がある。とても優しい先生と看護師さんたちがいる診療所で、輝も体調が悪いときはここでお世話になる。昔ながらの診療所のように、お年寄りが多いからバリアフリーなのだ。

白杖を必死に動かし、走るに近いスピードで診療所を目指した。

「先生！」

診療所なのだから静かにしないといけない、と頭では分かりつつ、大きな声で呼んでしまった。でも今は気にしてられない。

「北川《きたがわ》くん！ どうしたの？！」

看護師さんの声だ。焦った声色なのは、普段輝が大きな声を出したり、息を切らすような動きをしないと分かっているからこそ何かあったのだと察してくれたのだろう。

「外におじいさんが熱中症でっ、座ってぶつかってっ」

きちんと説明しないと思うのに、上手く言葉にならなかった。しかし。

「なにっ！」

先生の声が聞こえた。きつと輝の大声を聞いて診察室から出て来てくれたのだろう。

「どこか分かるかい？！」

「ええと、ここから右に曲がった、自販機のところですよ！ バス停の近くの！」

そう言えばバタバタと走る音が聞こえた。重い音は外へ。軽い音は部屋の方へ。きつと先生は現場に向かい、看護師さんが必要なものを取りにそれぞれ走ったのだろう。

輝も必死に先生を追いかけた。間違った案内はしていないと思うのだけれど、やはりおじいさんが心配だった。

（一体いつから座っていたんだろう……）

輝の問いかけにも答えるのがつらそうだった。もう先生が診てくれるのだから大丈夫だと思うのだけれど、それでも心配だった。

おじいさんがいる場所にはすぐに着いた。先生の声も聞こえる。よかった、きちんと先生が診てくれた。

「おじいちゃん！」

先生の必死な声。どうしたのだろうか。

こういうとき、輝はとてもどこしくて苦しい。目が見えたら何かできることがあるのに、何も見えず、ただおろおろすることしかできない。少なくとも邪魔にはならないようにと思うのだけれど、静かに立っている人でもいれば気付かずぶつかってしまう。

「先生！」

看護師さんの声が聞こえた。それから数人の足音も。

「大丈夫か！」

男性の声だ。診療所の患者さんかもしれない。事情を聞いてやってきたのかも。

「意識が……とにかく急いで診療所へ運びましょう！」

輝は近くの塀にぺたりと背中をつけた。みんながどう動くのか分からないので避けようがなかったのだ。それでも輝の前、すれすれのところを誰かが通った。その後を必死に着いて行く。

「おじいさん……」

「もう大丈夫だよ」

先生の優しい声。何をしたかは分からないけれど、適切な処置をしてくれたのだろう。

「ありがとうございます」

「いえいえ。教えてくれてありがとうね。それより腕を擦り剥いてるな」

「あ……えと、さっきのおじいさんにぶつかっちゃって」

「そうだったのか。じゃあ手当をしようね」

先生に導かれて椅子に座らせてもらう。足に布が触れた。

「おじいちゃんのベッドだよ。心配だろうと思って」

「はい。ありがとうございます」

よかった。顔も様子も見えないけれど、この前でおじいさんが寝ていると思うと安心できた。

「さあ、痛いところはどこかな」

「手のひらと、肘です」

痛むところを先生に見せると水を掛けられた。きつとバケツか何かの上で洗い流してくれているのだろう。

「思い切り擦り剥いてるなあ。きれいなピンク色が……」

「……やめてください」

生まれつき全盲の輝にはピンク色がどんな色かは分からないけれど、肉の色だということは知っている。この先生はたまにこうやって人を怖がらせて遊ぶのだ。

「ははは。大丈夫、生きてる証拠！ ほら、これでいい。足を捻ったりはしていないね？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

おじいさんはすぐに目を覚ますだろうとのことだったので、そのままっていることにした。先生はまだ診察があるし、看護師さんも忙しい。ここには入院設備はなく、処置室としてベッドがあるだけだから最低限のスタッフしかないのだ。

「ごめんね、何かあったら大声で呼んでくれたらいいから」

「はい」

何か、に自分で気付けるように目の前のベッドに意識を集中させる。

先生は転んだ傷はないと言っていたから、輝の擦り傷だけでおじいさんの不調に気付けたのは幸運だったのだろう。

しばらくそうしていると、布の擦れる音がした。

「おじいさん……？」

「あ……ああ……」

「よかった、気分はどうですか」

輝からは何も見えないものの、おじいさんは輝の顔が見えた方が安心できるだろう、と立ち上がり身体を伸ばす。

「君は……」

「ぶつかっちゃって、本当にごめんなさい。あの、ここはさっきの場所の近くの診療所なんですけど、大丈夫ですか」

「ああ、だいぶ楽になったよ。君が運んでくれたのか。すまなかったね」

「いえ。あ、先生呼びますね」

この処置室でお世話になったこともあるので、構造は分かっている。処置室のドアを開けてその場で「せんせい」と呼ぶとすぐに「はい」という声が聞こえた。ちよつとアットホームな感じが温かい。

「君はついててくれたのか」

「心配で……あ、先生がご家族に連絡したと言っていました」

「ああ、自分でするよ」

おじいさんは自分で電話ができるくらい回復したようだった。話し声が聞こえ、途中で「ここは……」と言っていたので「田中診療所です」と助け舟を出した。通話が終わり、おじいさんから感謝の言葉をもたらしていると先生が入ってくる。

それからもう一度様子の確認がされて、もう大丈夫だろうとなった。でも一先ず、点滴が終わるまでは安静にとのことだった。

おじいさんは本当に気分が良くなったみたいで、色々な話をしてくれた。もう大丈夫だからと言われたけれど、どうしても心配で家族が迎えに来るまで一緒にいたいと言ったのだ。

おじいさんは話し上手で聞いていてとても面白かった。若いときの恋愛のこと、孫のこと——いい年して身を固めないで困っている、なんて言っ。和やかな時間を過ごしていると、控えめなノックの音が部屋に響いた。そしてドアの開く音。

「失礼します」

きれいな声だな、と思った。落ち着いた声。

「おお、隆司《りゅうじ》。すまん」

「……体調は」

「もう大丈夫だ。こちらは……すまない、名前を聞いていなかったね」

「北川と言います」

「北川くん。彼が助けてくれて、こうしてずっとついていてくれた」

「そうですか。お世話になりました。ありがとうございます」

話し方。トーン。大人だ。年上。仕事ができそうなイメージ。

「いえ、あの、僕がおじいさんにぶつかっちゃって」

「違うよ。わしが地面に座っていたんだ。北川くんに気付かず急に足を伸ばしてしまつて。そうだ、すまない、怪我はなかったかな」

「はい、大丈夫です」

擦り傷くらい怪我には含まれない。

「御礼を」

今度は若い男の人の声。おじいさんの息子さんだろうか。

「えっ、いえ、僕は何もしていないんです。ただこの先生におじいさんのことを伝えただけで、本当に何もできなくて。見ていただけて言うか、見ることもできないんですけど。でも元気になって本当によかったです。じゃあ僕はこれで。お大事にしてくださいね」

「ああ、待ってくれ。私は橘《たちばな》という。北川くん、本当に御礼をさせてほしいんだ」

「橘さん。いえ、本当に元気になってくれたことで十分です。それでは失礼します」

おじいさんと、迎えに来た人の方を向いて一礼し、身体の向きを正面に戻したところで何かにぶつかった。

「おっと！ ごめんね、大丈夫？」

先生だった。

「ごめんなさい。先生、ありがとうございます」

「もう暗いよ。大丈夫かい」

「はい、大丈夫です」

「送っていきましょう」

その声はおじいさんの家族の男性だった。

「いえ、僕の家、すぐ裏なんです。それにほら、暗くても関係ないですから」
笑って言うと、先生に怒られた。

「こら。襲われたらどうするんだい」

「あー……」

それは確かに怖いな、と思う。杖を持って歩いているとどうしても危険な目に遭いやすくなる。前に一度ひったくりにあつて、ここで怪我を診てもらったことがあったのだ。

「氣を付けて帰ります。近いから本当に大丈夫です。先生ありがとうございます。おじいさんも、お元気で」

「本当にありがとう」

おじいさんが元気になってよかったな、そう思いながら帰路についた。

※ ※ ※

「いいこだったなあ」

三崎《みさき》隆司《りゅうじ》は祖父、橘源一郎《げんいちろう》と共に後部座席に座っていた。

「……で、どうして勝手に出たりしたんですか、会長」

「花子さんに会いたかったんだ」

「行くなど言っているんじゃないんです。勝手に行くなど言っているんです」

源一郎はこうして勝手に出歩いて、よく部下を困らせている。今回はあの気の良い青年に助けられたからよかったものの、何かあったら部下が責任を負うことになるのだ。

「供《とも》を付けてのデートなんて楽しくないだろう」

「で、花子さんには連絡したんですか？」

「デートの帰りだったんだ。問題ない」

「……問題ない、ですか」

三崎は隠すことなく深い溜息を吐いた。

~~~~~

それから週に二回ほど、三崎は甘いものを片手にやってくるようになった。

「輝、ただいま」

「おかえりなさい」

挨拶も「お邪魔します」から「ただいま」になって、三崎も勝手知ったるといった感じでくつろいでくれる。輝もそれを図々しいなんて思うことなく、落ち着ける心地良い関係が続いていた。

でも本当は、心地良さ以外のものも感じていた。好きだ、と思っていた。だって三崎はとても優しいのだ。

三崎が初めて家に来てから、すでに今月だけで五回目だ。来る日はいつも火曜日と木曜日。これは輝の休みに合わせてくれているからなのだけれど、木曜日の後は次の火曜日までがとて長く感じる。さすがに仕事中に三崎のことを考えてしまうことはないのだけれど、それでも空き時間や往復の時間、家でもずっと三崎のことを考えていた。

「輝？ どうした。具合が悪いのか」

「いえ、大丈夫です。隆司さん、お仕事お疲れ様でした」

「ありがとう」

「今用意しますね」

三崎の滞在時間は少しずつ伸びてきている。最初は二時間程だった。そして最近ではゆっくり、昼に来て夕方方くらいまで。それはとても嬉しいのだけれど、長く過ぐせば過ぐした分、夜が寂しくなってしまう。寒さが厳しくなってきたから余計にそう思うのだろうか。

「輝。どうした。今日は様子がおかしいぞ」

「いえ、なんでも」

「何でもないことはないだろう」

ああ、そうだ。何でもないなんてことはない。けれどまさか、好きですなんて言えない。もっと一緒にいたいとか、帰らないでとか、もっとたくさん、毎日会いたいとか。そんなことは女の人が言うべき台詞なのだ。だって三崎も輝も男なのだから。

「輝。何かあったのか？」

「いえ、昨日から一気に寒くなったので少ししんみりしてしまっているのかもしれない」

「……体調が悪いわけじゃないんだな？」

「元気です。大丈夫」

もう半月弱で今年が終わる。人生で一番あつという間に時が過ぎた半月だったように思う。だって毎日、次に会える日が楽しみで仕方なかったのだ。

「それならいいが……寂しいのか」

「……少し。でも、冬だからですよ。寒いから。温かいココアでも飲めばばっちりです」

「輝。強がらなくていい」

「え……？」

「今は俺がいるだろう。一人じゃないんだ」

そんなこと、言わないでほしい。だって甘えれば甘えただけ悲しくなるから。今のところ恋人はいないと聞いているけれど、次こそ彼女ができたと聞かされるんじゃないかと怖くてたまらないのだ。だってこんなに優しい三崎がモテないはずがない。

「……隆司さんは？ 彼女できそうですか」

「彼女？」

「だって来週はクリスマスじゃないですか。隆司さんモテそうだし、冬はみんな恋愛モードになるんですよね？」

「……ああ、クリスマスか」

「忘れていたんですか？」

「忘れていた。この年になるとイベント事に疎くなる」

そう言って切ないふりをして笑うから、それがおかしくてつられて笑ってしまった。

「この年って……そんな年じゃないじゃないですか」

彼女の話の流れだと気付いたのは、三崎が帰ってからだった。

『はい！ ついに明日！クリスマスイブですねえー！』

いつもより三倍くらいテンションが高いパーソナリティの声。

『ユウキちゃんは誰と過ごすの？ 彼氏？』

『やだ、彼氏なんて！ 私結婚してるんですけど！』

『え、そうだったの？！』

『まさかの？！ 一緒に番組やって三年になるんですけど！』

息のあったやりとりはとても楽しそうだ。先月までの自分だったらきくと聴きながら笑っていただろうに。しかし今年は少しも楽しい気持ちにならなかった。

今日は月曜日だ。仕事を終えて、帰宅して、凍った身体をお風呂で解凍して、ご飯を食べて、今。あとは歯ブラシをして寝るだけだ。明日は休み。

輝はマッサージの仕事をしている。全盲者が多く就く業界だ。仕事はやりがいがあるし、施術中の会話も楽しい。けれどどうしても体力が足りなくて、休みを挟みながら週に四日程しか働くことができないのだ。

そして明日の休みはクリスマススイブ、そして三崎の来る曜日。まるで図ったようなタイミングだ。けれど、来ないだろうと思っていた。

(だって、クリスマススイブだし……)

サンタは赤い服を着ている。それは知っているけれど、輝には赤い色がどんな色なのか分からない。ジングルベルの歌は知っているけれど、ベルの形が頭に思い浮かべられるわけではない。恋人同士が仲睦まじく愛を囁き合う日だと聞いたことがあるけれど、恋人がいたことはない。

「はぁ……」

三崎は一体誰と過ごすのだろう。

輝の家へ来るのは火曜と木曜というのが定番になっていたから、最近はもうわざわざ来ると連絡を寄越すことはしない。けれどきつと今夜は電話が鳴るだろう。「明日は行かない」と。うん、きつと来る。そして「わかりました」って何事もなかったかのように返さなくては。三崎は優しいから、家族も恋人もいなくて、さらに友人とも気軽には会えないと知っているのでイブの日に輝を一人にすることに罪悪感を抱いてしまうだろうから。けれどそれではデートの邪魔をしてしまうようなものだ。それは避けたい。

きつといい人がいるのだろうか、と思っている。彼女にはまだなっていないだけのいい人。だって、三崎が家に来るのは火曜日と木曜日だけ。けれど輝の休みはそれに加えて日曜日もあるのだ。でも日曜日に三崎が来たことは一度もない。それはきつと、三崎のいい人も日曜日がお休みだからなのだろう。そんなことをつい考えてしまう。会えるだけで幸せだ、なんて最初は思っていたのにどんどん欲が大きくなっていく。

三崎は輝の初恋の人だ。今まで恋愛感情というものを誰かに抱いたことはない。けれどきつとこれがそうなのだろうと確信していた。

「はぁ……」

もう何度目の溜息だろう。こんなときは温かいココアに限る。立ち上がり、マグカップに水を入れた。そしてそれを電子レンジへ。ケトルやヤカンでの熱湯の取り扱いは危ないから。

温まったマグカップを取り出そうとしたときだった。三崎からの着信を携帯が告げた。

突然の音への驚きと、嫌な予感が当たってしまったというショック。動揺でつい腕を引いてしまい、指先が持ち手に引っかかってしまった。

「あつっ！……！」

手にお湯が掛かってしまった。

「痛い……」

電話は気になる。けれど出たらきつと明日のキャンセルの話なのだ。——三崎からの電話に出たくないと思ったのは初めてだった。いつもなら着信を心待ちにしているのに。



無視してしまおうか、と一瞬そんなずるい発想をしてしまう。けれどダメだ、とその願望を振り払う。電話に出なければ、キャンセルを告げられなければ、もしかしたら三崎は氣にして明日来ようとしてしまうかもしれない。そして今日は無理だとわざわざ言っ、それから出掛けて行くかもしれない。そんな迷惑をかけるわけにはいかなかった。

「もしもし……」

『すまない、寝ていたか』

「いえ、大丈夫です」

『もう寝るか』

「え？ いえ、もう少し起きていますが」

『今から行ってもいいか』

「え……あ、はい……」

実はすでに近くにいるんだ、と三崎は言った。何か急ぎの用事だろうか。律儀な人だから明日の埋め合わせなんて考えて、直接キャンセルを言いに来てくれるのだろうか。

通話を切って、数分でインターフォンが鳴った。

「はい」

「俺だ」

来るのが三崎だと分かっているけど、必ず確認するようにと言ったのは三崎だった。声を聞いて確認するまで決してドアを開けてはいけないよ、と。

~~~~~

「……年末年始は連休になるか」

「はい。カレンダーがないので分からないんですけど、だいたい二十八日頃から休みになります。営業開始は四日頃なので、あとは曜日次第ですが」

「その間、うちに来ないか」

「え」

「一緒に過ごしたい」

「でも、隆司さんはお仕事……」

「それくらい休むよ。三が日は挨拶に行かないといけないところもあるが、多少は融通が利く」

「……僕も一緒に過ごしたいです」

心からの気持ちだった。けれど。

「ああ、楽しみだ」

「でも、ご迷惑になります」

「……どうして」

三崎の声のトーンが下がった。けれどきちんと伝えておかなくてはならない。

知らない場所はそれだけで精神的に疲れてしまうのだ。

輝は室内用の白杖を持っていない。職場の間取りはもう頭に入っているし、誰かの家に上がることもないからだ。例え誰かの部屋にお邪魔して、そこが綺麗に片付いた部屋であっても、普通の人には分からない危険や恐怖がある。

輝自身、今のアパートに住み始めてから一度も引越しをしたことはないし、模様替えだっていない。物の配置だってずっと同じ場所。どんなに身体が疲れていても、使ったらすぐに片付ける。そうしない何が何だか分からなくなってしまうから。

でもきっと、これは経験者じゃないと分からない。

知らない場所は間取りだって覚えるのが大変だし、たとえば玄関、リビング、トイレと必要な部屋の場所を覚えるだけならまだしも、その中でソファ、テーブル、観葉植物や棚の場所、狭くて比較物的の少ないはずのトイレだって飾りでもあればぶつかってしまうこともある。キッチンなんかはもうお手上げだ。人の家だから勝手なことをするつもりはないけれど、スプーン一つ自分で探し出すことはできない。洗面所やお風呂だって、蛇口の場所、高さ、全て何も分からないのだ。だから家事もできないどころかいちいち同行してもらって教えてもらわなければならない。だから迷惑にしかないのだ。

三崎は口を挟むこともなく、輝が話し終えるまで静かに聞いていた。

「輝と生活できるなら、全て俺と一緒にするよ。年末年始は業者も入れない。だから二人だけで過ごせるから気を遣うことはない」

「けど……」

気を遣うのだ。それは元々の性格でもあるし、三崎のことを好きだからこそ余計に。失敗して迷惑をかけたなり、手間がかかると振られてしまうのが怖いのだ。

「大丈夫。食事はテイクアウトやデリバリーになるが、健康的な食事を出す店もある」

「……でも、その、お風呂だって……」

「一緒に入るのは嫌か」

「えっ……だって、恥ずかしい……」

そう言えば、三崎は何も言わなかった。入浴介護が大変なことを思い出してくれたのかもしれない。そこまで勉強してくれているかは分からないけれど。

「……なら、輝の家に泊まってもいいか」

「え、それは……それはいいんですけど、でも狭いですよ」

「その分くっついていられるだろう」

「けど、寝るのだって狭いし、寝返りだって打てないし」

かと言ってベッドを買い替えることもできない。金銭的に許されたとしても、部屋がベッドで埋まってしまう。

「なら俺の家だ。ベッドは広いぞ」

「……そうなんですか」

一瞬、三崎と誰かが一緒に寝ているところを想像してしまった。誰かと闇を共にする、というのは以前小説で読んだことがある。あまり詳しい描写はなかったけれど、学校で習った理科や保健体育の授業と組み合わせればそれが子作りであることくらいは知っていた。

「言っておくが、うちのベッドでは俺以外寝たことはないぞ」

まるで輝の胸の内を読んでいるかのような言葉。

「この家に入ったのも業者を除けば輝だけだ」

「引っ越してきたばかりなんですか？」

そう思ったからそう訊いただけなのに、三崎は豪快に笑った。こんな笑いは初めてだった。

「……隆司さん？」

変なことを言ったのだろうか。だって三崎には祖父である橘だっているし、友人だっているだろう。それにとってもモテそうだし、女の人と閨を共にしたことだってあるはずだ。だからそう考えれば、引っ越してきたばかりなのだろうと思ったのだ。

「輝は面白いな。輝が心配しないようにと事実を言ったんだが、そう解釈するとは」

「え？」

「ここに住んでもう五年だ。引っ越してきたばかりじゃないよ」

「あ、そうなんですか……けど、おじいさんは来ないんですか」

「来ないよ。じいさんも忙しいからな。実は他にも部屋があるんだ。ここは完全にプライベートな部屋。他の部屋も自分の持ち物だが、人が訪ねてくるようなことがあれば俺もそちらに行く」

「そうだったんですか……部屋をたくさん持つてるなんてすごいですね」

「……ああ、まあ必要に応じて、といったところか」

よくわからなかったけれど、忙しいのだろう。今度ヤクザの本を探してみようと心に決める。そうしたら少しは三崎のことを理解できるかもしれない。ただ、点字翻訳されたものがあればだけ。

「他の家では誰かが泊まることがあるが、どの家のベッドも、俺のに関して言えば俺しか寝たことはない」

「ふふ、分かりました。誰かと閨を共にするときは相手の家つてことですね」

「……閨」

「え？ あ、ごめんなさい、失礼なことを」

「いや……ああ、うん、まあ経験がないとは言わないが、これからは輝だけだ」

「え……と」

それは三崎とそういうことをする、ということだろうか。

「あの、すみません、僕男なんですけど」

「知ってるよ」

「そういうのは子供を作るためにするんですよね？ ごめんなさい、僕は子供作れないです」

「……ああ、そうだな。でも触れ合うのは楽しいだろう」

「え……と」

自分の知っていることと、きつと三崎の知っていることは違うのだ、とすぐに分かった。盲学校で学び、情報源はラジオだけ。インターネットも使えない。本は、点字翻訳されているものしか読むことができない。最近では点字翻訳されているものも多いけれど、一般的な本に比べればその数は驚くほど少ないのだ。だから輝が知らないことは世の中にはたくさんある。本だって、昔の名作ばかり読めばその頃の常識や言葉しか学べない。友人だって同じような条件で生きているので、世界観はほとんど変わらない。

「……いろんなことを知っていいこう。大丈夫、教えるよ」

「はい……」

年末年始は三崎の家で過ごすことが決まった。

※ ※ ※

その日の夜、寝ていると陰茎が疼いた。その違和感で目を覚ます。

「あ……」

勃起は久しぶりだった。陰囊に溜まったものを出さなくてはいけない、ということは知っている。だから疼けば出す。けれど、なかなかうまくいかないことも多い。けれど今日は違った。前に読んだ本が頭の中に浮かんだ。普通の小説だったけれど、閨のシーンが書かれていたのだ。男が女の性器に陰茎を突き差し腰を振る。それがどういう動作でどういうことなのか、全く分からない。けれどとてもいやらしいことなのだ、ということだけは分かった。そしてそれはいつの間にか三崎と輝に置き換わっていた。

~~~~~

「……乳首、反対も弄ってほしい……」

「こう？」

右手が左乳首を離れ、右乳首に触れた。けれどそれでは足りないのだ。そうされると今度は左乳首が物足りなくなってしまう。

「や……あの、両方してほしいです」

「ああ。じゃあこの姿勢じゃない方がいいな」

「え？」

「起き上がろう。大丈夫、くっついているから」

先に身体を起こした三崎に引き起こされる。そして右側から背中に戻った体温。

「ほら、これなら両方の乳首を可愛がれる」

「あっ！ ああっ！」

両方を同時に弄られるのは先ほどの快感の比ではなかった。気持ち良くて身体が動いてしまう。

「ああっああっ！」

声も止まらない。うるさいだろうか。隣の部屋や上下の部屋に聞こえてしまうだろうか。気になるのに止まらない。

「可愛い。乳首だけでそんなに啼いて。乳首気持ちいいな」

「きもちいい！ 気持ちいい」

腰が砕けそう。おかしくなりそう。陰茎はすでに完全に勃起していた。

「あっ、あっ！ 隆司さっ……」

「ん？」

耳元で話されると、かかる吐息にきゅんとしてしまう。こんなのおかしい。まるで自分の身体じゃないみたいだ。

「陰茎、がっ……触りたっ」

普段自分をするときはこんなにづらい思いはしない。陰茎が硬くなればそのまま手で抜いて精液を吐き出す。だからこんなにむずむずして、ぞわぞわして、頭が真っ白になるようなことはないのだ。勃起したから出すという作業ではない。

「ダメだよ。セックスのときは自分では触ってはいけないんだ」

「えっ……やっ、ああっ！」

どうしてダメなのだろう。それが作法なのだろうか。でもそれならどうしたらいいのだろう。入れるべき女性器はここにはない。

「ペニスは限界か？」

「ペニス……？ あっ、あんっ、何っ……？」

「ああ、陰茎のことだよ。ペニスはもう我慢できない？」

我慢できないか、なんて。こんなに苦しくても我慢するのが普通なのだろうか。分からない。何も分からない。

「我慢っ、できないっ」

何度も領けば、乳首を弄っていた右手が腹を辿って下りて行った。触ってもらえるのだろうか。三崎が陰茎を抜いて吐き出させてくれるのだろうか。

そう期待したのに三崎の手は陰茎には触れることなく太ももを撫でた。内腿がピクピクと痙攣する。

「ああっ、あっ！」

左の乳首と右の太もも。あと少し手を動かしてもらえれば陰茎に触れてもらえそうな気がするのに。なのにその手は優しく内腿を撫でるだけ。

「やあっ！ 陰茎がっ！」

「その陰茎、という言い方もそそるな」

「えっ、なにっ、あっ！」

「学校で習った通り、なのかな。ここは何と言う？」

内腿を撫でていた手が陰囊に触れた。温めるように包み込まれる。

「あっ、あんっ、いんっ、陰囊ッ」

ちゃんと答えたのだからもう陰茎に触れてほしい。それともこの気持ち良くてつらいのが閨事なのだろうか。

「……やばいな、おかしくなりそうだ」

「え？ あっ！！ ああっ！」

陰囊を揉まれ、乳首をぎゅっと強く抓まれた。乳首は少し痛い。なのにやめてほしいとは思わなかった。むしろもっと強くしてほしいとさえ思った。

「ああっ！ ああっ！」

「陰囊、揉まれて気持ちいいか」

「気持ちッ、乳首もっ」

もっと、もっと。けれどやはり陰茎も触ってほしい。さっきお願いしたのに。でも優しい三崎がそれをしてくれないということはやはり陰茎は女性器に入れて吐き出すしか許されないのかもしれない。

「ああっ！ 苦しいッ！ 女性器っ、女性器ほしいっ！」

「何っ?!」

「えっ……?」

三崎の手が離れた。背中体温も。どうしたのだろう。女性器を用意してくれるのだろうか。けれど三崎は何も言わないし、触れてもくれなくなった。どこかで何かを用意するような気配すらない。ただじつと、恐らく座っている。

「隆司さん……? どこ……?」

近くにいる。それは気配で分かるのに触れてくれない。

(どうして……?)

「やっ、やだ、隆司さんっ！ 隆司さんっ！」

「……輝」

「あ、隆司さんっ！」

声のした方に手を伸ばす。身体に触れた。ペタペタと触り部位を確認する。どうやら胸だったらしい。そのままお腹に手を回すようにして縋り付く。

「隆司さんっ！」

約5万2千文字。

ヤクザ×全盲青年

ハピエンです。

※挿入なし、兜合わせ有りです。